

場所から蒐集した文書中には、年月を附したのも可なり澤山有る。然るに此の千字文の書體は勿論それ等の中の五代宋初のものとは似ず、唐代のものたる事は争ふ可からざる所であるが、それも晩唐期のものとは風格を異にして居る。それで自分は之を中唐以前の書寫と考へ、従つて西藏字で示した字音も、無論この期以前のものと見て誤無からうと思ふ。果して然らば此文書は從來の知られて居る漢字音研究資料の間に伍して、時代の上から丈けで考へても、最も重要な位置を占めるものゝ一と見ることが出来る。

次に考ふべき事は、此の對音千字文の性質である。寫眞に就いて認むるが如く、此の斷簡は漢字千字文を基にして、其の各字に就いて一々の字音を左側に記入したもので、此の地方に居つた西藏人の漢字習讀に便する爲に作られたものと認められる。かゝる目的の爲に作られたものであつて見れば、その寫出した字音は性質上から見ても相當正しいもので、當時敦煌地方に行はれた音を聽取るが儘に書寫したものと考へられる。同じペリオ氏蒐集文書中の蕃漢對譯語彙(No. 2762)、(の裏面)、また拉薩に在る唐蕃會盟碑(唐穆宗長慶二年建)等をはじめ、その他にも多少唐代の漢字音を知り得べき材料は存在するが、此等は元來字音研究の爲に作られたものではないから、其の正確の程度に於て逕庭も存するし、文字の數に至つても勿論比較には成らぬ。

要するに茲に寫し出された字音は、唐時代の中期以前に於て敦煌地方に行はれたものと考へて差支無からう。敦煌は西方邊在の地、もし方音を區別すれば西方音とも稱すべきものであつて、従つて其の字音の中には特殊の發達轉訛を有するものが有つたらうと想像されるし、事實また之を見出すことが出来るが、然もまた能く中原の正音を傳へたものと認めらるゝものが多い。而してその特殊の發達轉訛はそれ自身既に甚だ興味の存する所であるのみな